

## 学校法人常磐会学園 常磐会短期大学付属 泉丘幼稚園・いずみがおか園(大阪府堺市)

心育む・心つながる 科学する心「試す・くりかえす」

### ☆この論文の選ばれたポイント☆

本園で過去5年間取り組んできた「科学する心を育てる」実践をもとに各年齢の子どもたちの発達をきちんと捉え、「科学する心」を整理し、実践に取り組んでいます。「試す、繰り返す」子どもの姿に焦点を当てて、よく実態を捉えている点も特徴的です。さらに、そこから「科学する心」の育ちの見える具体的事例を通して、子どもの発達を「つなぐ」保育者の役割を捉え直し、園全体で共有されていることが評価されました。

審査委員長総評より

心を育む・心がつながる 科学する心

試す・くりかえす



常磐会短期大学付属泉丘幼稚園  
いずみがおか園

## 目 次

I	研究をすすめるにあたって	1
II	実践事例	
	●0歳児 人やものに触れる【科学する心】	
	①『ぽっとなコロコロどこいくの?』	2
	②『どんなあじ?』	3
	●1歳児 ものを使う手だてを考える【科学する心】	
	①1歳児の好奇心をゆさぶるものとのであい 『牛乳パックの積み木』	4
	②『かきかきクレパス』	5
	●2歳児 まわりのものに気づく・模倣する【科学する心】	
	①『素材遊びの中から(ペットボトルの蓋を使って)』	6
	②『散歩から(緑道にて)』	7
	●3歳児 周りの人やものとかかわる・感性が育っていく【科学する心】	
	①『あおむしからのつながり』	8
	②『つないで…つないで…』	9
	③『遊びの中でみ～つけた』	10
	●4歳児 見たてで遊ぶ・友だちと同じ目的で遊ぶ・協力する・工夫する【科学する心】	
	①『こんなのできたよ!』	11
	②『あわあわしよう!』	12
	●5歳児 調べる・工夫する・創造する・予測をたてる・協同する・再構成する【科学する心】	
	①『光をだす器械…OHPを使って遊ぶ子どもたち…』	14
	②『雨粒を集めよう!』	16
III	研究のまとめと今後の課題	18

## はじめに

本園は、平成19年4月、幼保連携型認定こども園の認定を受けた。平成16年9月、0歳児から2歳児の保育園開設にともない、0歳児から5歳児までの一貫した保育・教育を進める中で、それぞれの歳児がかかわりあって生活していく中で遊びの実践をすすめてきた。

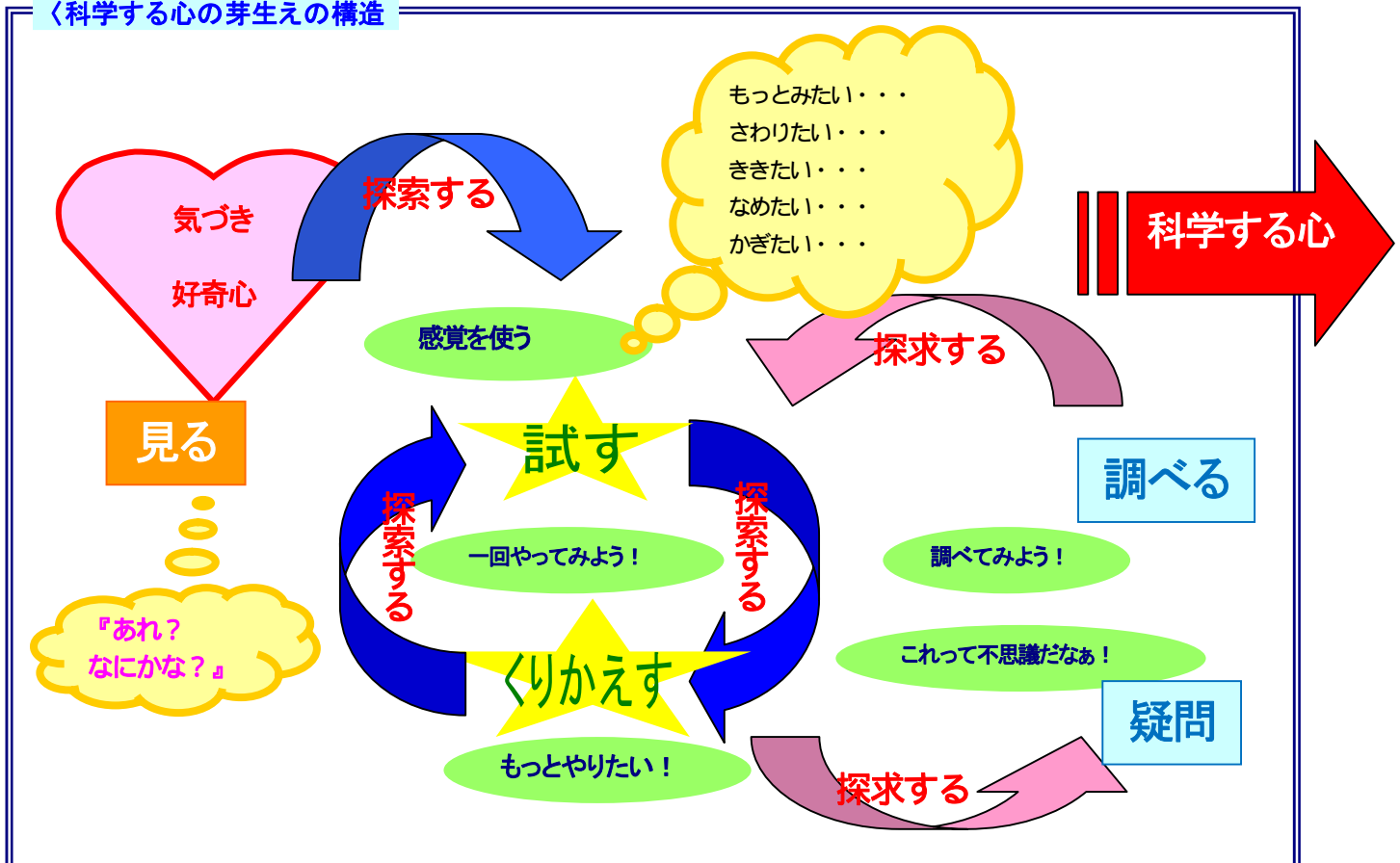
これまで5年間での【科学する心】の研究では、本園周辺の恵まれた自然環境をいかし、子どもの日常の生活の中に【科学する心】がどう育っていったのかを主に、5歳児の生活での他（人やもの）とのかかわりを中心に探ってきた。今年度は0歳児からの【科学する心】の芽生えに着目し、0歳児から5歳児までの普通の生活や遊びの中で子ども自身が「試す、くりかえす」行為を見つめなおすこととした。子ども自身が「試す、くりかえす」行為は、好奇心を持ってかかわっている姿であり、そこから【科学する心】が芽生え、それぞれの歳児の育ちをととして、【科学する心】を育み、つないでいくことで【科学する心】が育っていくのではないかと考え、研究をすすめることにした。

なお、本研究は何か特別なプロジェクトを組んで、自然や環境にかかわる保育実践を行うのではなく、本園ならではの環境を折りまげながら、日々の保育の中でみられる子どもの活動を系統的に見つめ直し、検討したものである。

### 、研究をすすめるにあたって（取り組みの経緯） 試す・くりかえす

過去5年間の研究テーマ・・・「科学性の芽生えを培う豊かな環境づくり」「子どもの見る目を見つめて」「確かめる」「散歩を通して」の実践からも、子どもの【科学する心】には、《好奇心》が大きな役割を果たしていると考え。初めは『あれ？ なにかな？』と《気づき》、《好奇心》をもつところから次の段階へと進んでいく。子どもの『あれ？ なにかな？』と思う、この些細なことばや表情やしぐさがまさに【科学する心】の芽生えの第一歩なのではないか？そして、《好奇心》だけで終わるのではなく、《好奇心》から「さわってみたい！」「もっとみたい」など、あらゆる感覚器官を使って色々な方法で**試し**、さらに「もっとやってみよう！」「もう一回やってみよう！」とくりかえし遊ぶという『探索する』流れが見えてきた。それを **科学する心の芽生えの構造図** として下図のように考えてみた。

#### ＜科学する心の芽生えの構造＞



各歳児によっても、月齢によっても『探索の変化の過程』が見られる。0歳児にも「あれ？」と思う何気ない《気づき》から《好奇心》が芽生えはじめ、そこから、**試したり、くりかえしたりする遊びの経験**を年齢を追うごとに積み重ねることで、5歳児になってくると、「不思議だなぁ？」「調べてみよう！」「探求する姿」も出てくるようになるのではないかと考えた。こうしたことから、**試す・くりかえす**子どもの姿から見られる各0～5歳児までの《気づき》や《好奇心》とはどういうものか？また、その【科学する心】を育み、つなぐことはどういうことなのかを実践事例をととして考えていきたいと思った。



A 児は、いつもは何をするにも慎重。始め一歩下がって観察をしてから参加する傾向があった。でも大きな箱を出した時はすぐに近づいてきて箱の上のおもちゃをさわりはじめていた。



持っていたおもちゃを穴にぼと～ん！  
「あれ？おもちゃどこいったん？」落とした穴をすぐにのぞくかと思いきや A 児は音がした下方向をじっと見て、「もうひとつ穴を見つけたようだ。発見！」



「あれ？おもちゃはどこ？」発見した穴に手をぐいっとつっこんで指先を使って探っている。もう少し奥まで・・・。「うん？手前かな？」真剣な顔つきで、探索中！  
「あっ！おもちゃ！」発見！



おもちゃをぎゅっと握った A 児、穴からだそうとがんばっている。握っているのなかなか出てこな～い！一度手を離すと「ぼっと～ん！」あ～あ！また穴の中に消えたおもちゃ・・・。



諦めるのかと思いきや、左手に変えて再チャレンジ！おもちゃが穴から顔をのぞかせた時の A 児は「やった！」という表情！もう少しというところで、またまたおもちゃはコロリンコ！残念！



「あ～あ！」とふと下を向いた瞬間、「あれ？」変な穴を発見！興味津々の顔に変わった A 児。またもや探索開始～！場所を移動して・・・。



この穴は、いったい何だ？そっと覗きこむ A 児。穴の形に興味を示してるのか？それとも、消えたおもちゃを探しているのか？  
しばらくじっと観察している。手をのばして穴につっこむのかと思いきや・・・。



意外や意外・・・。A 児は、穴にふたをしてしまった。保育者の予想を反しての行動・・・すごく興味深かった。すると次の行動にもびっくり！ふたを持って箱を持ち上げた A 児。真剣な顔！



力いっぱい持ち上げた A 児。ひっくり返そうとしたのかな？途中で、持ちこたえられなくて手を離して・・・ドン！床に落ちた箱。するとその勢いで、ふたが開いてコロコロと探していたおもちゃが！ヤッタ～！



K児は、好奇心旺盛。部屋の真ん中に穴のあいた大きな箱を置くと子ども達が集まり、いろいろなもの(おもちゃ、ボール、ビニール袋、新聞紙などを穴に入れはじめた。それを見た K児、目をきらきら輝かせながら突進!



箱にたどり着いた K 児。まず始めに箱にガブッ!とかぶりついて味見?穴にはまだ興味はないというか視線もまだ低いので気づいていないようだ。ちょうど味見?も終わって目の前にあったのが...大好きなビニール袋!発見!



穴の中から顔を出していたビニール袋をスーッと引き抜いた K 児。大好きなビニール袋を手にして満面の笑み。次にビニール袋も味見...



場所を変えた K 児は、穴を**発見!**「アッ!」またまた大好きな新聞紙を見つけた K 児。穴の中から新聞紙を取り出している。



取り出した新聞紙をじっと見つめている K 児。穴の中には、おもちゃ、ボールなどいろいろ入っていたが興味はなく、好きなものに興味があったようだ。



新聞紙を見つめた後は、パクッと味見?見る さわる 取り出す 味見するの探索活動を楽しんでいた K 児。

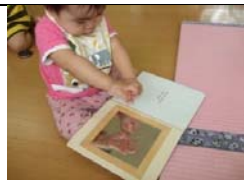
《考察》保育室の真ん中にど〜んと穴のあいた大きな箱(つかまり立ちが出来る高さ)を置いてみた。さあ〜!子ども達の反応は?・・・あえて遊び方を見せたりせず、どのような行動をとるのかが興味があり、少し離れた所から見ることにした。保育室のすみではなく真ん中に置くことによって子ども達も「なんだろう?」と思うと同時に近づいてきた。目をキラキラ輝かせて突進してくる子、すぐに穴を発見して覗き込む子、まわりにあったおもちゃ、新聞紙、ビニール袋、布などを次々と穴に入れていく子、箱にかぶりつく子、穴から物を取り出す子など様々な行動が見られた。穴に物を入れ終えた子ども達はすぐに違う遊びに移行。そんな中、ひとり黙々と続けている子を発見!時間にして15分ほどのA児の行動に注目した。見る(好奇心)(穴をのぞく) さわる(穴に入れる) 試す(穴に入れたものを探す) くりかえす。この行動によって徐々にこの穴のあいた大きな箱のおもしろさに気がついたA児。A児はクラスで1番月齢が高い子ども。では、月齢差によって行動がどのように違うのか注目してみた。A児との月齢差半年のK児では、見る(好奇心) さわる(取り出す) 試す(口に入れてみる) くりかえす。二人の行動によって、探索の過程に変化があることがわかった。他の遊びにおいても注意深くみると、「あれなかな?」という好奇心からはじまるのは同じでも、月齢が高い場合は、遊びが持続したり、「試す・くりかえす」姿が多く見られたりする。月齢が低い場合は集中する時間も短く、他のものへ興味は次々移ってしまった。

以上のことから、子どもの好奇心を引き出すような遊びや環境構成や月齢差を考慮したり、時間的余裕や空間的工夫が適切にとれたりできる保育者の姿勢が何よりも大切であることがわかった。

「あれっ! なにかな?」 part1



N児は、何やら不思議なものを発見!はじめじっと見つめていたが次にそっと手をのばしてみた。



絵本を見ているN児。「あれ?」またまた不思議なものを発見!顔を近づけたり、手を近づけたり、いろいろ試している。

《考察》保育室近くに食品収納庫(ステンレス製で映るもの)がおいてある。近づいてみると「あれ?」何か見えるのを発見!それ以来横を通るたびに寄っていき、顔を近づけたり、手をあげたりしてその様子をじっと見ていた。保育室では、絵本を自由に手にとれるように置いている。ある絵本の一番最後のページに紙製の鏡がはってあり顔がうつることを発見したN児。顔を近づけたり、絵本を上を上げたり、手でさわったりといろいろ試していた。

展開 牛乳パックを重ねあわせたものを積み木として遊んでいるS児。普段の遊びでも物を積み上げたり、並べたりする事が大好きである。上に積み上げようとした。最初は一つずつ積んでいたがすぐに倒れてしまう。そして一番下を二つ置いた状態で積んでいくと、崩れることなく思い通りに重ねることができた。「うわぁー!!」と自分で拍手し喜んでいて、さらに上を目指す。

展開 ちょうど近くで同じような遊びをしていたN児は、一番下は横向きに置き、二つ目からは縦に重ねた。両手でしっかり牛乳パックを持ち、そーっと重ねあわせようとしている。N児のまなざしの向け方や手の動きから集中している姿を物語っている。

展開 積み上げていた物が崩れ、バラバラになった。今度は床に散らばっている牛乳パックを一人ですぐと集めだし、所定の位置へと運んでいく。保育者も牛乳パックを集め、手伝おうと何本かまとめて手渡すと、一度はしっかりつかむのだが、「バーン」と言って床に落としてしまう。その時の『音』が楽しいのか、満面の笑みで声をあげて喜び、何度か同じ事をくりかえす。しばらくすると自分の気に入った牛乳パックを手にし、まずは横へと並べ始める。それを見ていた友だちがイスと思ったのか、座ろうとすると「だめ!」と力強い口調で相手に自分の思いを伝えていた。しつこく寄って来る子どもに対しては、両手と胸で抱え込むようにしてS児なりに必死で守ろうとする姿が見られた。



**考察** 遊具など『物』に対してまずは「自分の物・・・」という思いが1歳児にはある。そこでしっかり自分の遊びの場がくれた子どもは次の遊びへと進んでいく。積み重ねる遊びを始めた子どもは、たくさんの牛乳パックを集めながら『自分の場所』もしっかり確保していた。周りに居る子どもにも邪魔をされてもやめることはなかった。この年齢なりに「これがしたい!!」という強い気持ちがあるのだと思う。何度も同じことをくりかえし、時には違う面白さを発見しながら『自分で作る』ということに興味を持ち、楽しさを覚えていくのを感じた。事例にあげた二人の子どもは、日頃レゴブロックで遊ぶことも大好きで、そこでも「ものを積む」という遊びをよくしている。形や素材が違って「積む」という遊びをくりかえし展開していくことができる力があることがわかった。

事例1-②～かきかきクレパス～

子ども達の好きな遊びのひとつ『お絵かき』。1枚の大きな紙にクレパスを手にし、自分の手が届く所までいっぱい、自分の手が届かない所までいっぱい描く子ども、クレパスを‘握る’ことが嬉しくて保育者と一緒に描くことを楽しむ子ども等、ひとりひとりが自分の思いを出している。普段いろいろな遊びをしている中で『にぎる・つかむ・つまむ』といった手の動きが器用になるにつれ、子ども達の遊びもさらに広がっている。

- 4月 1枚の模造紙に4～5人の子ども達でなぐり描きを楽しむ。クレパスは保育者が手渡す。クレパスを見て「お絵かきするの」と、物を見てそれが何であって、何をやる物なのかがわかっている子どもや、にぎりにぎと感触を確かめ、時には口へ運ぼうとする子どもがいたり、様々な姿があった。「食べたらダメよ!」と子ども同士で声をかける姿が見られた。
- 5月 八つ切りの画用紙を1人ずつ渡す。クレパスは自分で好きな色が選べられるように箱を子どもの手の届きやすいところに置く。



〇にぎる・つかむといった基本的な手の動きが身についてきた子どもは、自分でクレパスをコントロールし、画用紙からはみだすことなく、力強く描いている。保育者が「ぐるぐる描いてるね」と話すと「うん、ぐるぐるかいてるの」と楽しそうに答えた。すると、それを聞いていた周りの子どもも「ぐるぐる」と言いながら真似を始めた。自分なりに一生懸命クレパスを動かして、丸や三角を描く子どももいれば、クレパスを転がしてそれを楽しんでいる子どもなど、個々の姿がみられた。



○色はほとんどの子どもが2～3色使っていた。「はい、どうぞ」と隣にいるお友だちに渡してあげ、それに対して「ありがとう」とお礼を言う子どももいれば、色の好みがあるのか、渡された色に「イヤイヤ」とし、自分で色を探そうとする子どももいた。

○自分の物にこだわる子どもは、常に使いたいクレパスを両手に持ち、一方は描き、もう一方はしっかりと握りしめて、器用に使い分けていた。

**考察** 描くということよりもクレパスを持つということに子どもたちは楽しさを感じている。そこから紙に興味がつり、好きな色を使って描いている。何を描くかは子どもたちの自由でたくさんの色を使う子どももいれば、1色のクレパスで無心に手を動かしている子どももいる。目の前に置かれているクレパスの色を真剣に選び、隣の友だちの様子を見ながら「～してるねえ」と保育者に知らせる姿があった。

**6月** 直径18cmの丸い形の画用紙を用意する。色はピンク色・水色・黄色の3色を用意し、子ども達に色を選ばせる。



○初めての形にも抵抗なく、喜んで手を動かしている。力の強弱はあるが、ほとんどの子どもがクレパスをしっかりと持つことができるようになり、手の動きもスムーズになった。『コン、コン、コン』と音をたてながら点を描く姿がみられ、その音に周りの子どもも反応し、真似をしてみた。部屋に響き渡る音に「うわあ～」と声をあげて喜ぶ子どもや「コンコンしてるの」と嬉しそうに話をしてくれる子どももいた。

○画用紙が動き、描きにくくなると、片方の手で紙を押さえる姿が見られた。

○今まで自分に集中していた姿から、近くの友だちの様子を見ながら、そして時にはお喋りしながら描くという姿も出てきた。

○クレパスを片付けようとするが、たて・よことバラバラになる。それでも本人は箱の中に入ったということで満足し「はい、どうぞ」と箱ごと保育者のところまで持ってきてくれた。



**考察** クレパスの持ち方が、どの子どももしっかりと握れるようになり、それと共に描く線や形が力強く、太くなった。普段の生活の中での積み重ねで、手先の動きも刺激され、自分の思い通りに手が動かせるようになってきている。また『コン・コン・コン』とクレパスを上下に動かして点を描きだし、その音の響きに他の子どもたちが一斉に真似をしてみた。大人にすれば何気ない音が、子ども達にはとても興味がひかれるものになったのだと感じた。また、少しずつ集中できる時間も長くなっていった。

1歳児は好奇心がさらに旺盛になってくる。その好奇心をゆさぶる、ものと子どもとの出あいの橋渡しをする保育者の役割が大切になってくる。

「あれ？ なにかかな？」 part2



あれ？  
なにかあるよ



ちょっと  
つつこんでみよう！

子どもはあなが好き。手を入れたり、何かを突っ込んだり・・・好奇心をゆさぶるものとのあいです。

事例2 - 素材遊びの中から(ペットボトルの蓋を使って)

2歳児 うさぎ組

今まで作られた玩具で遊ぶことが多かった子ども達。初めてペットボトルの蓋を出した時は「これでどうやってあそぶんだろう？」と言うような驚いた顔をしていたが、箱に入ったペットボトルの蓋を見るなり飛びつき、外にばらまき始め、しまいには箱をひっくり返し床一面にペットボトルの蓋が転がるのを楽しんでいた。その中から「みて～これとこれいっしょや！」と同じ色の蓋を探したり、自分の欲しい蓋を集め出したりと様々な行動を繰り返していった。



遊びの展開 あれあれ？ できた！！

保育室にペットボトルで作った長い筒の坂を設置しておいた。それを見つけた子どもが手に持っていた蓋を上から入れる。蓋がころころと転がり落ちるのを見て「きゃ～」「わぁ～」と声を上げ楽しんでいた。するとその声に惹きつけられるように他児も集まり、同じように転がし始める。A児がペットボトルで作った短い筒を見つけ、筒に入れたが、途中で止まってしまった。叩いてみるが落ちてこない。詰まっていることに気づいていない他児が次から次へと蓋を入れる。いつまでも蓋が落ちてこないことで、やっと詰まっていることに気づき同じように叩いてみるが落ちてこない。上から手を入れ取ろうとするが届かない。下からも手を入れるが届かない。ちょうど詰まっている所に小さな穴を見つけ指を入れ動かす。少し動いたが落ちない。そこへB児がブロックを持ってきた。(様々な形がある中から長いブロックを選んできた)下からブロックを持った手を伸ばし突くとついに落ちてきた。一緒にいた子ども達は「きゃ～」「やったぁ～！！」と声を上げ喜んでた。

**考察**いつもならひとつしかない場所や物を取り合う子ども達だが、この時は押し合いにもならないで、友だちが入れたペットボトルの蓋が転がるのを一緒にみて楽しむことができていた。また、周りの保育者にも助けを求める声もなく、自分達で“これが無理なら次はこれ”と試行錯誤を繰り返しながら、詰まった蓋を取り出すのに成功した。その間の子ども達の会話はほとんどなく、「わぁ～」「きゃ～」といった歓声であったが、詰まったものが出てきたときの歓声は満足感にあふれたものであった。子ども達の思いが同じ目的を達成したという共有したものであったと思われる。

遊びの展開 あれ～？

ペットボトルの底の部分を切った短い筒を床に縦に置き、蓋を入れる。いっぱいになったところで持ち上げるが底が無いためこぼれ落ちてしまった。「あれ？」と何度も何度も同じことをくりかえしているうちに嫌になってしまった。そこで保育者が底のあるペットボトルをそっと近くに置いてみた。それを見つけると持っていた短いペットボトルの筒の上に重ねもう一度入れ始めた。その後、他児が短いペットボトルの筒を固定しているところで蓋を入れ遊んでいるのを見つけ、見に行く。そのうち固定された筒の上に自分の持っていたペットボトルの筒を置いてみた。すると他児が持っているペットボトルの筒の上からペットボトルの蓋を入れはじめた。そこから二人で筒を覗き蓋が落ちていくのを「きゃ～」「わぁ～」と声を上げ楽しんでいた。



**考察** 何度も入れたり持ち上げたりをくりかえしすることで、底がないことに気づく。しかし底がある物がなければ同じことをくりかえすだけで終わっていたのではないだろうか。また、ふたつあることでくっつける、重ねるといったことを試すことにより新たな発見もできた。そして、他児ともかかわりを持つ姿もあり遊びが広がっていったと思われる。

## 事例2 - 散歩から（緑道にて）

散歩にでかける時はいつも散歩用のリングを持って並んで歩いている。散歩中に子ども達が興味を示すのは花や虫、そして階段や緑道のふちなどの段であった。普段はリングを持って歩いていると個々に動き回ることはないが、この日は公園やグラウンドについてから放すリングを緑道の下で放してみることにした。

**遊びの展開** 「いち・にいの・さん！！」とリングを放すと少し坂になった緑道を「きゃ〜」と走り出す子ども達。途中まで行くと下で待っていた保育者の所までまた走っておりてきた。それぞれ走るスピードも違うため、のぼる子とおりる子とが混じりあっていた。そんなときA児が緑道の段になったところから落ちないようにそっとのぼり始めた。それに気づいた他児も“なんか楽しそう”とつられるように後から続く。途中までのぼると今度は段を降りて走って保育者の所まで来る。そうしているうちにのぼるときは段のところを、おりてくるときは緑道、というように自然と分かれていった。



**考察** 普段は散歩用リングで歩いていた緑道であるが、リングから離れて散歩ができることで子ども達も開放感を味わえたのか、保育者にむかって自由に歩いたり、走り回ったりを楽しんでいた。段を歩いている友だちを見て「自分もやってみよう」と思ったのか次々に後ろに並びはじめた。落ちないようにバランスをとる姿も見られる。そのうち自然と子ども達の中で坂をのぼるとき、おりるときのルールができてきたようだ。

2歳児では、『楽しい・おもしろい』という気持ちを、ことばとしての会話が成立しなくても、目を合わせたり（アイコンタクト）呼吸を合わせたりすることによって、お互いの気持ちが通じ合うようになる。0,1歳児とは違う2歳児ならではの『楽しい・おもしろい』を友だちと共有できるようになる。

また、そこまでの過程として、保育者とかかわることによって安心して遊んだり、生活できるようになったりすることが大切だと感じられた。

## 「あれ？ なにかな？」 part3

入園当初のY児はだっこされることも嫌がり、泣いてばかりの生活であった。しばらくするとお気に入りの電車を走らせてひとりで遊ぶ姿がみられた。ある日園庭でいたY児に近づき「ガタンゴトン〜」と地面に線がつくよう電車のおもちゃを走らせてみた。Y児もその上を同じように走らせた。保育者もそのまま「ガタンゴトン〜」と走り続けていると、Y児も「ガタンゴトン〜」と言いながら同じ線の上をついてきた。今度は「カンカンカーン！ ふみきりでーす」と電車の前をさえぎり、手でふみきりをまねてみた。Y児は電車を止まらせ「ふみきりでーす」と答えた。早く走らせると笑顔で同じように早く走らせ、「ジャンプ」というと「ジャンプ」と保育者の真似をしていた。Y児の大好きな電車をとおして保育者と楽しい気持ちが共有できた。



事例3-①「あおむしからのつながり」

3歳児 ばら組(保育園からの進級児クラス)

4月当初;エリックカールの『はらぺこあおむし』の絵本のCDの音楽に合わせてみんなが絵本を見た。次の日も子ども達のリクエストは『はらぺこあおむし』だった。何度も繰り返して読むうちに、あまり絵本には興味を示さなかった子どもCDに挿入されている歌は、ほぼ全員が歌うようになった。気づけば、CDがなくても一人が歌い出すとみんなが歌い出したり、絵本棚から『はらぺこあおむし』の絵本をとってきて、「せんせい、あおむしかけて〜!」と言いに来ようになった。

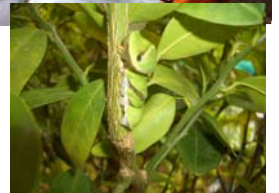


ある雨の日、年長児が手づくりのこいのぼりに乗って、ばら組の部屋に「のりませんか〜?」と遊びに来てくれた。数人の子がこいのぼりに乗って、年長組の部屋まで遊びに行った。年長組の部屋の真ん中にいたのはたくさんのアゲハチョウのあおむしだった。「あおむし!」と子ども達は興味津々にのぞき込んでいた。「みんなにも教えてあげようよ」と、何人かが一緒に部屋に帰りあおむしがいること伝えた。「どこどこ?」とどンドン年長組に集まり、うれしそうに見ていると、年長児が「さなぎもいてるで」と教えてくれた。「え?どこ?」と聞くと「こっち!」と廊下の方へ案内してくれた。『はらぺこあおむし』の歌を口ずさむと、絵本から、あおむしからさなぎ、さなぎからチョウになることがわかったようで、いつチョウになるのか楽しみにしていた。それから、「あおむし見にいいいい?」と年長組の部屋に遊びに行くようになった。

散歩前に読んだ『はるのむしをさがそう』の絵本をきっかけに、外でもダンゴムシやアリ、テントウムシを探すようになった。ある日、園庭に遊びに行こうと靴を履き替えていると、N児が「せんせい、あおむしってどこにいてるん?」と尋ねてきた。「どこかな?...」と言っていると、通りかかった年長児が「あっちにおるんちゃう?おいで!」とN児の手をつないで連れて行ってくれた。「こっちこっち」と言われて見ると、そこにはあおむしがいた。「ほんまや〜」と、とてもうれしそうに見ていた。「これはさなぎになりかけてるからさわったらあかんで」と教えてくれた。そうしていると、年長組の子が図鑑を出して調べ始めた。「それなに?」興味津々な様子で聞くと、一緒に見せてくれた。N児は夢中になってのぞき込んでいた。



5月;朝登園してきた子ども達のところに年長児から「チョウがうまれた!」という知らせが入った。子ども達は荷物もそのままに一目散に集まっていった。羽を乾かしているちょうを見て思わず手を出したくなる子ども達だったが、「触ったら飛べなくなっちゃうから見るだけよ」というと、触らないようにじっとみつめていた。



あおむしに興味を示したので、いろいろな紙芝居を読んでみた。そうしているうちに、チョウにもいろいろなチョウがいることに気づく子が出てきた。園庭で遊んでいるK児が「あっ!アゲハチョウ!」と言ったのを近くで聞いていた保育園の先生が「すごい!アゲハチョウって知ってるの?」と驚くと、「うん!」とうれしそうに答えていた。「白いチョウチョも知っているんだよね」と言うと、しばらく考え、「...オモシロチョウ!」と答えた。3歳児らしいかわいさ覚え方だった。

6月ホウセンカの水やりの前に小さく集まって話をしていた。その後、チョウになってホウセンカを見に行こうと『はらぺこあおむし』の歌のさなぎのところから歌うと、子ども達はじっとしながら一緒に歌い「あ、チョウチョ あおむしはきれいなチョウチョになりました〜」とチョウになるところでタイミングよくチョウに変身し、羽ばたいていった。

【考察】

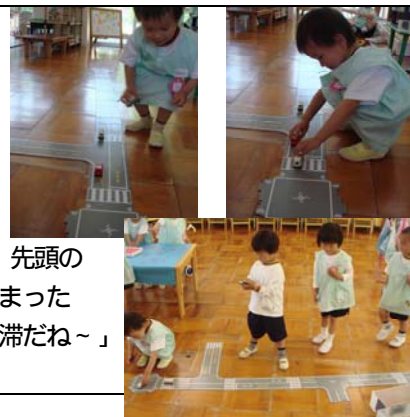
ばら組は保育園からの進級児がほとんどを占めている為、生活経験も他の3歳児とは違いがある。0歳から保育園に来ていた子ども達は友だちとのかかわりも深く、遊びの中でも、他の3歳児の新入児クラスに比べて会話も多く聞かれ、子ども同士がことばを交わしてかわりあう様子が多く見られる。絵本のCDという、子ども達の心にずっと溶け込んでいった音楽は、子どもの生活に溶け込み、話の内容に興味を持ちはじめ、くりかえし耳にすることで自然と口ずさむ姿が見られた。保育者がお話の中の一部のことばを捉えて話したり、歌のフレーズを口ずさんだりして、きっかけとなることばを言うだけで、子ども達の中に絵本の世界が広がり、そこから会話がうまれるようになった。このことで、子どもと子どもとのつながりがより深まり、身体表現をする中でなりきって遊んだり、実際にあおむしを観察し大切に育てようとするという遊びにつながったりし、子どもの感性が育っていく過程となった。

昨年保育園の2歳児の時に今の年長児との交流があったこと。ばら組の保育室が年長児と同じ2階のフロアであることから、初めは少し距離感のあった年長児とも子ども同士交流する姿も徐々に見られた。年長で飼っているあおむしを見せてもらうことで、さらに交流も深まり、年長児に教えてもらったことを、今度はばら組の子ども同士で虫の生態や触れ方などを伝え合う姿が自然にうまれていった。

あおむしからさなぎ、チョウへと変化する『はらぺこあおむし』の絵本の世界のチョウの羽化が実際に本物のあおむしがチョウになる様子を見て、絵本の世界からリアルな世界へとつながりができ、理解することができていった。1つの絵本をきっかけに、子ども達の世界は大きく広がっていった。

**遊びの事例1**

4月、ミニカーで遊ぶ子どもたち、初めは保育者がミニカーの道路のパズルを組み立て、遊べる環境を用意していたが、次第に自分で道を組み立て、友だちと一緒に遊ぶ姿が見られるようになった。自分の気に入ったミニカーを手にして遊んでいたS児。1本の長い道路を作ったり、「これ（パズル）はここにしよう！」と曲がり角を作ったり、何度も形を変えながら遊ぶS児の姿に、見ていた友達も加わり数人で遊ぶようになった。友だちと並んで「プップ～まがりま～す」「ここでとまります」と遊ぶうちに、先頭のミニカーが止まると続いて後ろのミニカーも止まる事に気づく。それを何度か試し、止まったミニカーが連なるのを見て、またくりかえすS児の姿があった。保育者が「この道路渋滞だね～」と言うと、「じゅうたいや～じゅうたいや～」と声を上げて遊んでいた。



**考察**

- ・入園当初の環境として、子ども達が親しみやすい遊具を出したことで安定して遊ぶことができ、自分の遊び場を見つけて遊ぶ姿が見られた。
- ・初めは道路のパズルをつなげて出来る1本の長い道路であったが、くりかえし遊ぶ中で‘どうやってつなげようかな...’と試しながら、曲がり角を作ったり、1周回れる道路を組み立てたりしていた。
- ・先頭でミニカーを走らせていたS児は自分が止まることで後からきていた友だちのミニカーが連なることに気づき、意図して何度もくりかえしていた。
- ・ミニカーが連なったことを“じゅうたい”という身近な言葉（一緒に遊んでいる友だちが共通する言葉）をくりかえし使い、声を上げて喜んでいたので、連なることの楽しさを感じていることがわかる。

**遊びの事例2**

5月、連結できる砂場の遊具の電車で遊ぶR児。この電車は連結部が何通りもあり、うまく組み合わせないと1つの電車にはならない。R児は「これは違う」とより分けながら電車をつなげていた。R児がつなげた電車の前に線を描くと、その上をR児の電車が通る。長く描くとそれを線路のように電車がついてくる。保育者が描く線路とR児の電車の追いかけてこのような遊びが続いた。しばらくすると、周りでプービーカーに乗っていたK児が来た。R児の電車の後ろに連なって...そのまた後ろに他児のT児も連なって、いつのまにか長い列になって遊ぶ子どもたちの姿があった。一番後ろでプービーカーを押していたS児が来て「はいっ、とおってください!」「どうぞ!」とごっこ遊びが始まった。その一方で、しばらくその様子を見ていたT児は、先頭の電車をひっぱるR児の側で電車にプービーカーがついてくる様子を見た後、先頭より少し離れて、線路上を列が動いて来る様子を見ていた。



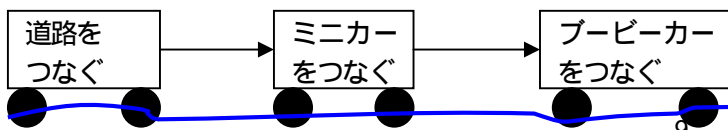
**考察**

- ・R児は遊びの中でくりかえし遊んでいた経験から、数ある中から先頭の車両と真ん中の車両があることを知り、真ん中の車両があればどこまでも長くできることがわかって電車を選んでいたのである。
- ・保育者が描いた線路上を通っていく中で、カーブなどの曲がる地点で連結している電車の後部がついてくるかを見たり、速さを調節するR児の姿があった。また、プービーカーに乗っていた子どもの中にも、前のプービーカーにぶつからないように車間距離を調節する子どももいた。
- ・列が動く様子が見える先頭の少し前という位置から見ていたT児は、友だちと一緒に‘連なる’事とは違い、友達が列になって移動するのを‘見る’という楽しみ方をしていたと思われる。
- ・ミニカーが連なる“じゅうたい”で遊んだ経験や戸外で遊んだ楽しさが友だちとの会話やかかわりを広めるきっかけになり、S児のようにごっこ遊びを楽しんだり、粘土遊びでは小さくちぎった粘土をつなげて長い道を作ったり、細長く丸めたものをつなげて「これへびだよ!」などと遊ぶ姿にもつながっている。

道路のパネルを長くつないでいく、道路に車を何台もつなげる。という子どもにとってつなげるという行為がおもしろく、つなぐという目的意識を持って遊ぶことで、つなぎ方や並べ方を試行錯誤する様子が見られた。

保育者と子どものことばのやりとりから、遊びが続いていく中で子ども同士の会話が生まれてきた。次第に子ども同士の会話も広がって交流も広がり、子ども同士のつながりもできた。

『つなぐ』という行為が、たのしい遊びとなる。友だちとのかかわりの中で試したりくりかえしたりしながら感性を育てるものとなった。



事例3-③「遊びの中でみつけた」

3歳児 さくら組

4月に新しく入園した子ども達。新しい環境に少しずつ慣れ始めた6月にもなると、周りの環境(人やもの)にも目をむけ始め、友だちのしていることを真似たり、友だちと同じ場で遊んだりすることを楽しいと感じるようになってきた。この時期の子どもは「あれ? なにかな」という気づきや「わ~おもしろい」という遊びの中でみつけた様々な好奇心につながる経験が大切であると考え、子どもの気づきにつながった事例をあげてみた。

事例 ごぼごぼ~・・・

ほうせんかに水やりをするために、ジョウロで水を汲みにきたときに、音を立てて泡が出た様子を見て「わ~」と声をあげた。保育者が「ごぼごぼ~」っていつてるね。という、後ろに並んでいた子どもが同じようにジョウロの水を入れる。今度はさっきより水柱が高く激しく吹き出した。「きゃ~」と歓声があがる。「今度はいっぱいできたね」というとまた次の子どもがジョウロを持ってくる。今度は何もなくスムーズに水が入る。「あれ?」という表情で、水をあげに行く。その後も何度も水を汲みに来てくりかえし楽しんでいった。



考察

・水が噴き出す様子を見て、ことばではなく歓声(わ~、きゃ~)や顔の表情から、それがおもしろいと感じている事に気づき、保育者が「ごぼごぼ、ごぼごぼっていつてお水がとびだしたね」と伝え、次々とやってみようとして試してみた。3歳児にはことばよりも、「ごぼごぼ」「ぎゅっ」などの擬音で伝える方がわかりやすいという事も伺える。この伝え合いの橋渡しとなる保育者の役割が重要となる。  
 ・1回ずつ水の噴き出し方が違う。中には期待がはずれ「おや?」というような表情が見られた。同じ行動をくりかえしながらどうすれば期待した水の跳ね上がりになるのか、何度もくりかえし試している様子がみられた。  
 ・見逃してしまいそうな子どもの気づきに保育者がどうかかわっていくかが普通の保育でも重要なことではないかと考える。「あれ?! おもしろい!」と子どもが感じるその一瞬を見逃さない保育者の感性も必要になるのではないかと考える。

事例 ぴちゃぴちゃ~

雨上がりの園庭。水たまりができたところで子ども達が遊びだす。長靴の子は水たまりに入り「ぴちゃぴちゃ」はねて遊びだす。砂遊びをはじめた子どもは、スプーンなど小さいもので水をすくってだんごをつくったり、砂場の遊具に入れてごちそうに見立てた遊びをしたりしていたが、しだいに水たまりに砂をいれて、そこに手を突っ込み大胆に遊びだす。気持ちいい感触を味わっていた。



考察

・みずたまりという子どもが大好きな自然の環境にひとりの子どもが遊び始め、その遊び方がだんだんと大胆になり、楽しい雰囲気をもも出し出している。保育者も仲間に加わり、ことばや表情で楽しさを伝えることで、周りの子どもも次第に引き込まれていく。泥のきもちいい感触そのものを味わうことが、おもしろい・楽しい気持ちとなる。  
 ・友だちと同じ場を共有し、同じ気持ちを共有することが、この時期の3歳児に大切な環境であると感じる。

事例 「いーれーて~」「いーいーよ~」

戸外で砂遊びを楽しんでいた子ども達。砂場横に設置してある、遊具の家の中に入り、砂や泥をごちそうにみたくて遊んでいた。家の中に入る時に「いれて」と子どもが声をかけると中から「いれよ!」と返事が返ってくる。そのうち「いれて」「いれよ」のことばのやりとりが繰り返し聞こえてくる。ふとみると家の入り口には列ができていた。



考察

・7月のはじめ。この時期の子ども達はひとり遊びから少しずつ友だちを意識して遊び始めている。並ぶという事は生活の中でも少しずつ知らせているものの、意図して教えるのではなく、子どもがこのように遊びの中で楽しさを感じることで、自発的にルールが決まっていくことがわかる。  
 ・子どもがお互いを意識し、友だちの存在に気づき始めていく。ことばのやりとりの楽しさを感じるるとともに、楽しさの共有をすることで、会話や感性が育っていくと思われる。



あれ? なにかな? part4

あれ?  
なにかでできた



どこさわった  
らいの?

くさい  
においがする

新しいものとのあいはいは、子どもの好奇心の芽生えをゆさぶるものである。どうなるのかな? どうして? という疑問やすごい!! という驚きや感動が子どもの感性を磨く機会となる。

はじめに

年少からの進級児と新入児の混合クラスでスタートしたひまわり組。4月の入園当初は環境の変化から不安な表情を見せる子どもも多かった。その中で次第に気の合う友達や気に入った遊びが見つかるようになり、安心して遊べるようになっていった。登園後身支度が終わるなり積み木箱をひっくり返して遊び始め、室内遊びの時間には必ずといっていいほど積み木で遊んでいる子どももいるほど、積み木遊びをすることが好きな子どももいる。積み木遊びを通して、子どもがどのように遊びを変化させ、工夫していったか友だちとのかかわりを通して見ていきたい。

**事例1** 「迷路ができたよ!」

保育者が積み木を並べてドミノ倒しをしてみると、子ども達も保育者を真似て積み木を並べだし始めた。並べては倒し並べては倒しをしばらく繰り返して遊んでいた。すると1人の男児が倒れた積み木の続きに「これ迷路やで!」と言いながら積み木を長く並べていった。それを見た他の子ども達もその子どもと一緒に積み木をつなげていたり、それぞれつなげた迷路を友だち同士でくっつけたりしていた。「ここはジグザグ道。」「ここはジャンプせな通られへんねん。」と、自分達で思い思いの道を作り、友だちとつなげていた。



**事例2** 「シーソーができたよ!」



登園時、スポンジ積み木を並べて数人の子ども達が積み木の上を落ちないように歩いて遊んでいた。その中で2人の女児が、三角形の積み木の上に板状の積み木を置いてシーソーを作った。普段あまり一緒に遊ぶことの少ない2人だったが、この時は2人で一緒に積み木を運び、一緒に遊んでいた。積み木の強度があまりなく、子どもの体重では積み木がしなってしまう、本来のシーソーのような動きはしないものの、自分達で動きながら、シーソーに見立てて遊んでいた。



強度があまりなく、子どもの体重では積み木がしなってしまう、本来のシーソーのような動きはしないものの、自分達で動きながら、シーソーに見立てて遊んでいた。

**事例3** 「動物園ができたよ!」

積み木を敷き詰めて遊んでいた数人の男児。初めは1人が始めたものだったが、次第に何人もの友だちが集まり一緒に作るようになっていった。敷き詰めた積み木の周りを囲って「これ僕のお家やねん。」「ここがお風呂で、ここがお布団敷くところ!」と思い思いの部屋を作り友だちと一緒に1つの家を作っていた。そこから、1人の男児が動物型の積み木を持ってきて、サイの積み木を家の中に置き、細長い積み木でサイの周りを囲い始めた。そして、「ここは動物の部屋やで。」と友だちに伝えたところ、家作りから動物園作りに発展した。それからは囲った家の外にも様々な動物の家ができ、動物園が完成していった。



**考察**

- ・積み木は同じ形のものがたくさんある事、大きさや色、形など種類が豊富にある事から、遊びが広がったと思われる。4月から繰り返し遊ぶことで、遊び方や並べ方の工夫ができるようになり、うまく倒れるように間隔を考えて並べたり、並べた積み木が倒れてしまわないようにそっと並べたりと、工夫して遊ぶ姿が見られた。
- ・個人の遊びであった積み木遊びが、次第に周りで同じ遊びをしている友だちにも目を向けるようになり、友だちとつなげたり、一緒に作ったりする姿が多く見られ、友だちと同じ思いや目的をもって遊ぶようになっていった。
- ・シーソーや動物園など、何かに見立てて遊ぶようにもなり、イメージを共有して遊ぶ姿が見られるようになった。
- ・「こうやってみたらいい?」と協力したり・工夫したりすることで役割分担をしたり、「こうやったらおもしろくなるかな!」と試したり考えたりという試行錯誤をしたりするという姿が見られた。

以上の事から

活動のつながり 子ども同士のつながりへ  
協同的な探索活動 問題意識の共有へ

というこの時期の4歳児としての『科学する心の芽生え』が見られた事がわかる。

**遊びから見られる科学する心**

ドミノ倒し	<ul style="list-style-type: none"> <li>・間隔を空けて並べる</li> <li>・そっと置く</li> <li>・友だちと協力する</li> </ul>
迷路	<ul style="list-style-type: none"> <li>・つなげて並べる</li> <li>・工夫して並べる (ジグザグ・高低差など)</li> </ul>
大きい積み木	<ul style="list-style-type: none"> <li>・作ったもので全身で遊ぶ</li> <li>・見立てて遊ぶ</li> </ul>
動物園作り	<ul style="list-style-type: none"> <li>・友だちと同じイメージを持つ</li> <li>・見立てて遊ぶ</li> </ul>

## はじめに

手洗いを始めるとなかなか戻ってこないH児・M児・N児。今日もまた、「みんなが待ってるよ～」と言われ続けやっと入室する三人。「何がそんなに楽しいの?」と思いつつも何も言わず見ていることに…。すると「ビール!」と喜ぶ声とコップに山盛られたハンドソープのあわあわあわ。見ておられず「もったいな～い!」とつぶやいてしまった。あわの感触がたまらなく気持ち良く夢中で遊ぶ子どもの姿から「やめられな・とまらないあわ遊び」それを存分に楽しめる遊びにしたいと思い、石鹸でも比較的安価な固形石鹸であわができるのを子ども達に見せた。すると「やりたい!」「どうやるん?」と子ども達が集まってきた。

## ○事例展開①「塩みたい!」(5月末)

子ども達が扱いやすいよう石鹸を4等分に切りプラスチックのおろし金で粉末にする。

「これ家にもある～」「お母さん使ってる」おろし金は子ども達にとって「見たことあるけど使ったことない」「大人が使う特別な物(子どもは使われへんのんとちゃうん?ええの?やらして!)」という感じで試してみる。おろしてもおろしても溜まらない石鹸。「できひん」とすねる子どもや大きい石鹸のまま水を入れる子どもも…。やっと出た白く細かい石鹸に「うわー塩みたい!」「なんで塩なん?」と保育者は思った。すると「プールで前やったなあ(プール開きの清めの塩)」を思い出している。それから石鹸を《おろす→開けて見る→おろす》をわくわくしながら続け石鹸を貯めていた。細かい石鹸があつという間に溶け大きなシャボンが嬉しくあわが膨らむ度に子どもの気持ちも膨らみ喜んでいった。

## ○事例展開②「水、いる?」

石鹸を入れ水を加え「あわなれへん」とかき混ぜ続けているW児。もう一方の手も、同じように宙に円を描いている。それでも泡が出ない。するとペットボトルに水を入れ、洗面器になみなみと注ぎあわがでないとまたそれを繰り返す。「水を入れたらあわができるんちゃうか?」とペットボトルで水を入れる役割をする子どもが自然に生まれた。途中入園して間もないT児もその中に入り側にいる友だちに「いる?」と小さな声で話しかけた。友だちの「うん」という返事を聞くなり顔があがり目を細め、少しずつペットボトルを傾けながら「こんくらい?(この位?)」と聞いていた。短い言葉のやりとりではあったがその中にはT児のいっばいの気持ちが含まれていたように思えた。このやりとりの後T児は何かふっきれたようでいろんな子どもに声をかけていった。気がつく洗面器から水が溢れている。それでも《混ぜる→水を入れる→混ぜる》をくりかえす子どもたちであった。濡れた机を拭くと雑巾と机がこすれてあわが生じた。子ども達はそのあわを見て明日への希望の光りを見つけたかのように「明日もやりたい!」と期待を膨らませ帰っていった。



## ○事例展開③「それがだめならこれがあるさ!」

「棒ちょうだい」と言った子どもの声から割り箸を使ってかき混ぜている。途中から入ってきたM児はなぜかスプーンを持って混ぜている。「せんせーい Mくんままごとのスプーンもってきてるでえ(あかんのにい)」と言われていた。棒がなかったので貸してもらうのを待ちきれずままごと遊びのスプーンを持ってきていたのだ。「それがだめならこれがあるさ」と自分で混ぜるものを調達するM児の気づきを認めると「それでしたい!」とそれに共感し、真似る子どももありちょっと得意気で嬉しそうなM児の顔が見られた。



## ○事例展開④「必殺 泡立て器!」(6月)

「何回やっても先生みたいになれへん」と弱気になるK児。思うように泡ができないのでこっそり手洗い場のハンドソープを出して遊ぶS児。あわを作るのに諦めかける姿がみられてきた。「思いつくことをいろいろやってみたけど…。」というようだ。そこで泡だて器を用意し、わざとピアノ上に持ち手だけ見えるように置いた。するとD児が「先生、あれなに?」と聞いてきた。保育者が取って見せると「これ混ぜるやつやろ?使っている?」と早速あわ作りへ向かっていった。



「ケーキ作りたい」「これならできそう!」と意気込みはりきってやってみるものの…。あわができない。そこで保育者がやって見せ、「魔法の粉をいれま～す。次に水をいれま～す。さあどうなる?」勢いをつけ一気にあわ立て開始。洗面器を傾けケーキ屋さんのようにやって見せた。だんだんあわが膨らんできて大きなあわからきめの細かいクリーミーなあわに出来上がっていった。子ども達はあわをとり両手で優しくつつみ、肘まであわを伸ばし気持ちよさそうに遊んでいた。その姿は以前ハンドソープで遊んでいた姿を思い出させたが、まるで初めてあわを手にするように大切に手に取り、「うわあ～!」と喜びの声をあげていた。シュッと押すと出てくるあわとは違い「自分であわをつくらう!」と何度も試しやってきた子ども達の思いがあわと共に膨らんでいたようにも見えた。

泡はすぐになくなった。そしてまたあわをつくりだしたが、今まで沢山の水を入れたほうが良いと思い込んでいた子どもが保育者の作る様子を見て水を少しずつ入れていくようになっていった。すると子ども達でも水の調節をしてあわをつくれる姿が見られるようになった。

### ○事例展開⑤ 「クリームみたい」

「ふわふわやあー」「クリームみたい」「食べたいなあ」と言う声が聞こえプリンやゼリーのカップを出す。すると「おいしそうやねえ」とふわふわの感触が気持ちよく手であわをカップに移し食べ物にみたくて、カップをひたすら並べる姿が見られた。その後、黄色いスポンジを三角や四角に切り一つずつ皿に入れた。それを見て「ケーキ！」とT児。するとK児はその上にあわをのせ「ケーキできた！」と見せにきた。同じケーキをイメージしたがクリーム付きのケーキのようだ。それから「〇〇ちゃんの誕生日にしよう」と誕生会をして遊ぶ姿が見られた。

### ○事例展開⑥ 「お母さん 頑張っ！」(7月)

プール参観が雨天のため保育室での参観・参加になった。子ども達はこの日もあわをつかって遊んでいた。すると「あーこれのことを言ったの～！」とお母さん。「お風呂の石鹸を洗面器に入れて遊んでいます。この頃石鹸がすぐに小さくなるんです。」と笑っていた。

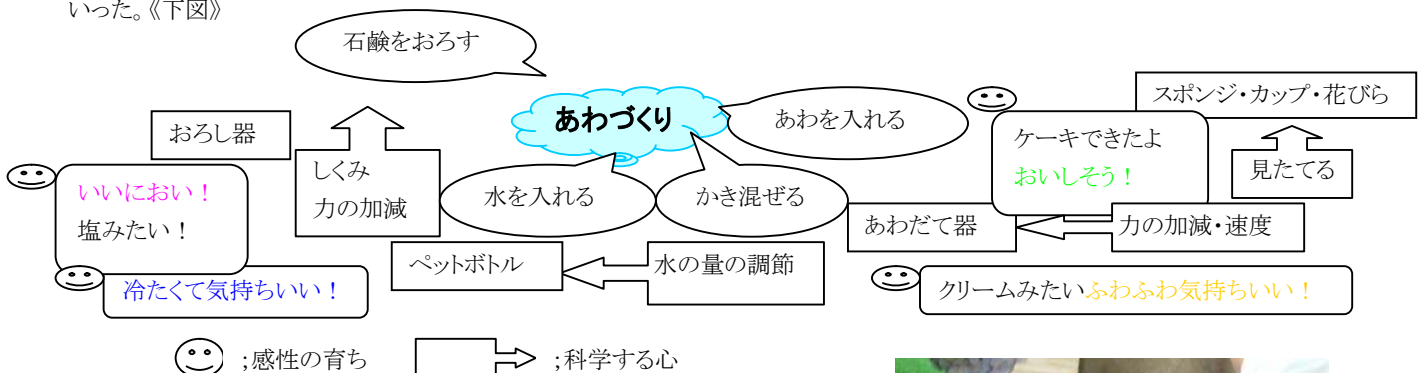
この日はしおれてきていたベランダのアジサイを手かごに入れておいた。するとケーキや容器の上ののせトッピングし「お花ケーキ」「(紫のアジサイをのせて)ぶどうケーキ」を作り「ダンゴムシ食べるかなあ」といつも見つける花壇の隅に置く姿もあった。

#### 親子の会話から

子ども:「こうやっていっぱい混ぜていっぱい」  
 お母さん:「腕が筋肉痛になりそう！」  
 子ども:「もっともっと」  
 お母さん:「……。」(カシヤカシヤカシヤ)  
 子ども:「おかあさんすごーい！」  
 お母さん:「……………」(カシヤカシヤカシヤカシヤカシヤカシヤ)(あわが出来上がった。)  
 こども:「気持ちいいー」「もうないからまた作って！」  
 お母さん:「ハハハハハハ」(苦笑い)

### 考察

- ・暑さが日に日に増していく中、水に触れあわをつくる遊びは五感で心地よさを感じるものであったと考えられる。それが、子どもたちの「遊び心」に刺激を与えた。なかなか思うようにならず四苦八苦したがそれがかえって「あわをつくる！」という気持ちを盛り上げさせた。
- ・初めての子どもでもすぐにできる遊びであったため、新入児にも「やってみようかな？」という気持ちにさせ、友だちにかかわるきっかけをもたらした。短い言葉のやりとりではあったがそれがこの後友だちにかかわる大きな出会いの一場面になった。「同じ遊びをする」ことで、楽しさややりたいことを互いの力で達成できるようかかわりあえ、「一緒に遊ぶ」姿に変わっていった。すぐにできる遊びであること、しかしすぐに満足できるものではなく、ちょっと頑張っ達成感を感じられるような遊びのあり方が遊びを継続させ、いろいろな子ども同士がかかわるきっかけとなった。
- ・泡をつくるという一人遊びからはじまり、子どもは入れかわりたちかわり遊んでいた。5月末から6月、7月という遊びの長いスパンから、子ども同士のかかわりあいも変化が見えてきた。会話が広がり、道具の使い方、遊び方などの遊びの伝えあいや必要なものを貸したり考え出す、「こんなふうにしたい」というイメージを共有する姿から、友だちと協力したり工夫したりする姿へと発展していった。
- ・保護者と遊びを共にしたことで遊びの見本をみることができ、遊びのイメージが具体化しより広まるきっかけとなった。このように保育参観をうまく利用し、保護者にも子どもが今遊んでいることを知らせ、共に遊ぶことを環境そのものに取り入れることで、子どもの遊びの刺激となることはもちろん、保護者にも子どもの現状を見てもらういい機会となった。
- ・泡を作るという、試したり・くりかえしたりする遊びを通して、「いいにおい」「冷たくて気持ちいい」「おいしそう」「ふわふわ気持ちいい」という感性の育ちが見られた。また見たてて遊ぶ・工夫する・イメージを共有して同じ目的意識を持って遊ぶという【科学する心】が育っていった。《下図》



**「あれ? なにかな?」 part5**  
 シャボン玉遊びをしていた子ども。ポイに張った膜をのぞいて「めがねやな!」といていた。今度は・・・むしめがねにみたくて、ダンゴムシを探していた。

これやったら  
よくみえるやろ!



## ◎はじめに

年長組として生活をスタートした4月。描くことを楽しめるよう、いろいろな素材に描くという環境をつくった。昨年度から「私は描けない」と“描く”ということに苦手意識のある子どもが多く、“描く”ということが楽しいと感じて欲しかったからだ。色画用紙、表面に凹凸のある紙(片ダンボール、和紙など)、石、発泡トレイなどを置いた。子ども達の中でもっとも興味を引いたのは透明セロファンに油性ペンで描く、という活動だった。透明セロファンは下においたものの絵や模様が透けて見え写し取ることができ、「描けた！」という実感がもてるようだった。描くということに苦手意識のある子どもにとっても取り組みやすく、思い通りの絵がかかるので、繰り返し楽しんでた。一つ一つの線を丁寧に写し取ったり、ペンの太さを変えて絵の細部にわたって写し取ろうとしたりしていた。また、人気のある下絵は順番を早く回すため、縁取りをして塗り絵状態になったら次の子どもに貸す→縁取った絵を好きな色に塗ると要領も良くなった。写し取るばかりでなく次第にセロファンに好きな絵を描く子どもも現れ始めた。

この作品を窓ガラスに展示したことから子どもの活動は広がりを見せた。

## ◎「先生、絵光ってる」

展示したセロファンの絵は日光の光を受け、光っているように見えた。そして子どもたちは足元に映っている絵に気づく。「おんなじ絵や！こんな所にも！」と大はしゃぎだった。「もう一枚描いてくる」と作品を増やす子ども。また「ここに貼ってみていい？」と窓ガラスに自分で貼っていかうとする子ども。窓ガラスにいっぱい絵と床にもいっぱい絵が映しだされていった。ガラスの前を通るとその絵が自分たちの体にも映る。上着に模様がついたようにも見える。「見て！ウサギのシャツやねん！」と上着をピンと張り、映してみせる。僕も私もと、体に映したり頬に映しては楽しんでた。映ることを想定し「〇〇の服作る！」とセロファンに自分の思いの絵を描きに行く子どもも現れた。

しかし、太陽はいつも光を届けてはくれなかった。雲がいたずらをする。太陽が雲にかくれたその瞬間、絵はみるみる薄くなり見えなくなる。「あ〜」と落胆の声。空を見上げては雲の動きを見て「もうすぐ移るで！ここに立ってこう！」と雲の流れを楽しむ姿もでてきた。濃く映る、徐々に消えていく、など光の強さの変化をも感じ始めているようだった。

## ◎太陽がでてこない日

「光る絵」というネーミングで子どもたちの遊びが続いていたが、子どもたちが太陽を待っても、その期待にこたえてくれない曇天と雨天が1週間近く続いた。子どもたちは「今日はあかん」とあきらめてしまう。「今日も無理や」と窓ガラスを見ない日もでてきた。興味は薄れていく。

## ◎「OHP?これなに?」

“光をだす”“映る”という面白さなら作れる。太陽が出てこなくなり興味が薄れつつあったとき、保育者は保育室の一角にOHPを設置した。“光を出す器械”として子どもたちは集まった。スイッチを入れたり消したり、ピント調節のネジを触ったり、手をかざしたり…とまさにいじくりまわす子どもたち。そうしている中で光に手をかざす子どもの一人が光の先に“光る絵”を持って立つ。その絵は上着に映り「ほら、かいじゅうのシャツやで！」と見せた。あつという間に光の先には“光る絵”を手にした子どもが行列をつくる。「先生見て！」上着に移る絵を見せようと思わず保育者に駆け寄ろうとするA児が現れた。しかし1歩2歩と歩くと上着から絵が消える。「あ〜あ」落胆の声。保育者は少し様子が見たいとすぐにはその子どもに近寄らずに待ってみた。するとOHP側にいたB児が「A君こっち向きながら先生の所に歩いていって！」A児は「え？」といいながらもB児の指示通り体をOHPに向けたまま歩き出す。B児はA児の動きに合わせてOHPを回転させた。見事に絵が上着に映ったまま保育者の所に移動する。A児とB児は見つめ合い笑顔浮かべた。「僕もしたい！」と動く映る絵のまわりに子ども達が集まる。

数日後OHPの天板の上に手をかざす子どものなかに、手の形を変えて壁に同じ用に動く手の影ができることに気づいた子どもがでてくる。「ここに光る絵のせよう！」と見ていた子どもがセロファンを持ってくる。予想は的中したようで壁に絵が映しだされた。「これは?」「これも！」と次々絵のをせ替えていく。逆さに映ったり、上部のレンズを動かすと絵が動いたり子どもたちはまたOHPを触ったり、絵のをせ替えたりしていた。

「ここまわしたらきれいに映ったで！」とピントが合うということに気づいた子ども。上部レンズを動かして光の先を移動させ絵を動かす子ども。天板の上でセロファンを動かして「映画やねん！」と次々絵を動かしのせ替えお話を創作する子ども。たくさんのセロファンのをせ「赤い服が紫になる。」と色の重なりで色の変化に気づく子ども。セロファンではなくおもちゃを持ってきて影絵遊びをする子どももでてきた。思い思いの遊びが始まる。光をつくりだす道具としてOHPには子どもたちがいつも集まった。ある時には「電気消してい



い？」と室内の蛍光灯を消し、薄暗い部屋の中でお話が上映される日もできた。

### ◎星の紙

光を操りだした子どもたちに刺激として天板がかくれる大きさの黒い画用紙に数箇所目打ち穴を開けたものを OHP の近くに置いておいた。

子どもの一人が何気なく天板にのせた。「星みたい！」そういって上部レンズを天井に向けた。七夕に近いこともあり星座の話もしていたので、イメージがつきやすかったようだ。今度は光を残す方法で映すことを楽しんだ。「僕はかに座。」と画用紙にカニの形になるように目打ちで穴を開ける。映してみると見事に光の点が並んでカニの形・かに座ができていった。星の上映に向けては保育室の電気を消すだけでは雰囲気が出ないので場を暗幕のある遊戯室に移動した。星やさんはプラネタリウムとなっていく。

### ◎晴天の日

夏の日差しがでてきた。園庭で食紅の色水遊びの中で色水を太陽に透かして試している子どもが「ここにも色が見える」と地面に映る赤い色水を指し、いろいろな色の色水入りのコップを並べた。「大きなOHPやね」と太陽を指して笑った。

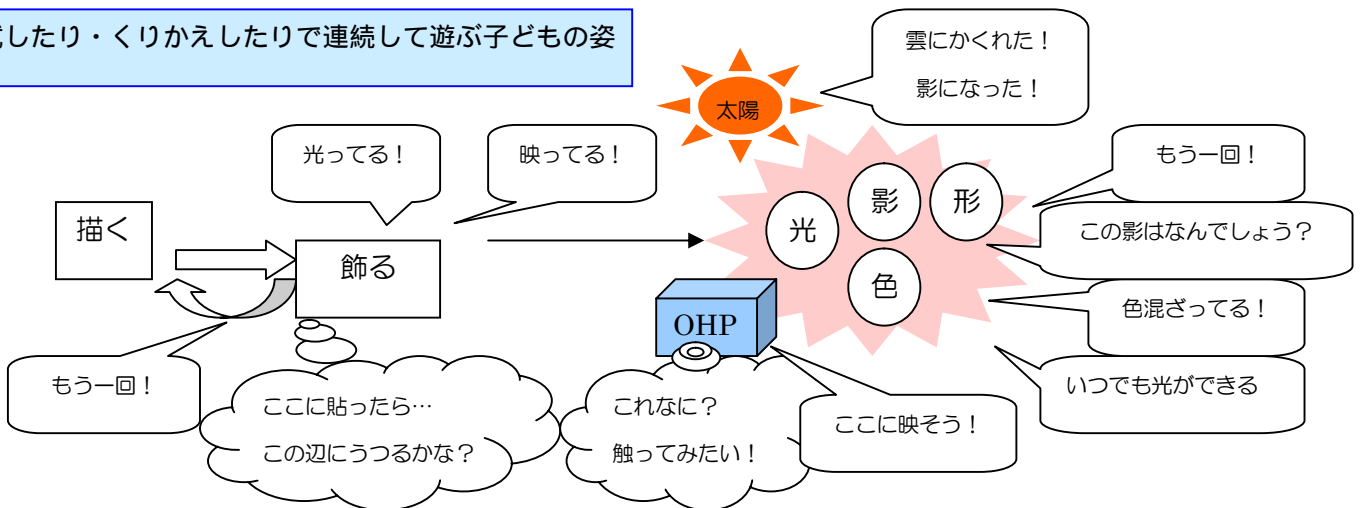
### =考察=

- ・ どの子どもも描くことを楽しんでほしい。その思いで始めた活動は、苦手意識のある子どもも抵抗がなくペンを握り走らせることができた。「これ何?」ここに描いてもいいの?と「描く」ということに身構えることなく興味のおもむくままにペンを握ったのだろう。そしてその中でも「僕も描けた!」と達成感の大きかったセロファン越しの写し絵は「もう一回やってみる!」「今度はこの絵かいてみる」と子どもの活動を繰り返させたのだろう。
- ・ 映しだされる絵、透けて見える絵の面白さ、光や影の存在、日頃から自然に目にはついていてであろう事象に立ち止まり、繰り返し光で遊ぶ中での気づきや遊びの広がりや5歳児らしくおもしろい。
  - 描いた絵や窓の貼り付けた絵と同じ絵が映るおもしろさ
  - 映し出される絵が自分の思うところ(上着や床、壁など)に映せるおもしろさ
  - 影が作れるという発見とおもしろさ
  - 光源(OHP) が自分の思いでつくり、変化させられることのおもしろさ ……など

子どもたちが心を揺さぶられ「もう一回!」と感じながら遊ぶ姿が多く見られた活動だった。

- ・ 暗い・明るい調節(暗幕の利用など)、焦点を合わせること、またこれまで絵の具などで経験したことのある色の混ざり・変化が改めておもしろさとなった。また光る場所を残す・陰を利用する、という星作りの活動も光を操るおもしろさがあり、くりかえし・試すという活動の要素になった。
- ・ 太陽の日差しという当たり前の事象を遊びへの活用として子どもが利用する。また、OHP という器械は常時光をつくりだせるものとして、子どもたちの「もう一回!」という気持ちにいつでも沿える環境となり、光を自分で操作できるというのは5歳児の好奇心をくすぐった。
- ・ 光を使った遊びをくりかえし、試すという活動は、子ども達の気づきにつながり、光遊び、影遊び、色遊び、器械遊び、に枝葉を伸ばした遊びとなった。気づきから試行錯誤を繰り返しながら「どうしたらいいかな?」「こうしたらどうなるか?」という友だちと問題を解決する姿が見られ協同的な探求活動へと展開していった。

試したり・くりかえしたりで連続して遊ぶ子どもの姿



**雨粒で音が鳴る！？**

子どもが外を見て、「見て！先生！白い線になってるで！」と降り出した雨を指さして言う。強く降っている様子を見て出た言葉である。なかなか降りやまず外で遊べないので、保育者が意図的に屋根づたいに落ちてくる雨粒を集めてみると、「おもしろそう！」と寄ってきた。初めは、なんとかして音を聞こうとする子ども達。ただ、プラスチック製のものしかなく、思うように音は鳴らなかった。どうするのかと見ていたらなんとかして音を聞こうと試行錯誤をし始め、微かに聞こえる音に大喜びしていた。すると、もっと聞きたい！と工夫する姿がでてきた。バケツをひっくり返してみたり、ペットボトルを立てたり、横に倒したり…。結局音は思うように鳴らなかったが、子ども達は楽しかったようで、「先生！雨って外に出られへんくて嫌やったけど、おもしろかったな！また雨が降ったらしような！」と、言っていた。



**●雨粒を集めたら…！？**

子どもの方から要求してほしい、とあえて缶等の音がよく出るものは用意せず、子どもの様子を見守ってみることにした。そんなある日、また急に雨が降り出す時があった。どうするのかな？と見ていると、「先生！また雨粒の音聞こうよ！」と言ってテラスに飛び出して、前と同じように何度も繰り返して音の出る場所を探している子ども達。すると、なんだか遊びが変わっていった。雨粒の音を「聞く」のではなく、雨粒を「集め出した」のだ。たくさんの雨粒を1滴1滴集め、カップいっぱいになると洗面器に移す。その洗面器がいっぱいになると、別の洗面器を持ってくる。いつのまにか、子ども同士での役割分担ができており、たくさんの雨粒が集まった。そして、一言。「先生！これメダカの為のお水やで！喜ぶかなあ…？」日頃からメダカの世話をしている時に、水道水をおひさまに当て、カルキ抜きをしていたことを思い出して出た一言であったのだろう。



**●雨粒って…きれい！**

雨の日のコースの帰り道。葉っぱにはじく雨粒を見て、「きれい…。」とつぶやくY児。どうにかして雨粒を集めようと葉っぱを握りしめ、草についている滴を集め始めた。普段口数の少ないY児。一人で黙々と集め始める。草(りゅうのひげ)についた滴を見つけたY児は歩み寄りその草を引っ張る。…もちろん、はじいて思うように滴を集められない。黙って、ただ何度も何度も繰り返すうちに、「ん？もしかして？」と思い始めたようで、とてもゆっくり引っ張るようになってきた。保育者は心の中で『そうそう！でも、ゆっくりでも引っ張ったらダメなの～！』と叫びながら、様子を見守ろうと黙っていたが、手の届かないところを手伝う時に、何気なく<トントン>と指ですると、葉っぱをつたって滴が自分の葉っぱにのった！その様子に思わず笑顔がこぼれる。次に見つけた時は<トントン>するようになり、両手を使いたいと思った時は、道路の柵にそ〜っと葉っぱを置き、<トントン>する、と工夫していく様子が見られた。



**考察**

●保育者は、初め、雨粒を見たら「音を聞きたい！音を聞かせてあげたい！」とこだわっていた。よく音が聞こえるように、と缶などを用意しようと思っていたが、子ども主体の遊びとなってほしいという思いから、あえて用意はせず、子どもの様子を見守ってみることにした。子どもが要求した時にはいつでも出せる準備だけはしていたのだが、一向に要求する気配はない。「どうするのか？」と見ていると、子ども達はバケツをひっくり返して違う面に雨粒を当ててみたり、ペットボトルの飲み口に入れようとしてみたり、違う容器を試してみたり、と試行錯誤していくうちに、みるみる容器やバケツに雨粒が溜まっていく様子に心が動かされているようであった。微かにしか聞こえない雨音よりも、目で見て変化がはっきりと感じ取れる「水が溜まる」様子に明らかに心が動かされていたのだ。それは「子ども主体」で遊びが変化していく瞬間だったのではないだろうか？そして、「水が溜める」ことが楽しい！と感じたからこそ、何度も何度も繰り返していたのではないだろうか？もっといい方法はないか？といろいろ試す姿が出てきたのではないだろうか？用意された環境からではなく、子ども主体で心を動かされたことで、色々試行錯誤する姿が見られたり、共通のイメージの中、ことばを交し合ったり、協力して目的を達成しようとする姿→**協同する姿**が生み出されたように思う。

ある程度の子ども活動を予測しながらも、保育者が先入観をもって環境を用意するのではなく、子どもの姿をよく見、何に心を動かされているのかを保育者自身が感じとり、子どもが必要としている環境を子どもと共に再構成していくことが、子どもの遊びが広がる可能性や、試してみたいと思う意欲を高めることができるのではないかと、思った。

●雨粒は、「音を聞く」「雨粒を集める」ばかりでなく、「雨粒ってきれい！」と感じることもできたようだ。Y児は小雨の降る中、レインコートを着用し、何度も何度も挑戦していた。雨がしたり、レインコートの中は暑く、汗をいっぱいかきながら、何度も何度も。まるで、雨粒を葉っぱにちりばめられた宝石か何かのように感じていたかのように。教師は思わず、「引っ張ったら雨粒は弾いて落ちてしまうよ！」と言いたくなるのだが、グッと我慢し、ただ傍で黙って見守っていた。普段口数の少ないY児。「なんで落ちるん！？」と言葉にすることは決してなかったが、時折「クッ。」と思わず声が出たり、「ふう」と息をついたり、悪戦苦闘している様子から、Y児の必死の思いが伝わってきた。少しでも葉っぱに落ち、きれいな粒だったりすると、振り返り無言で保育者に見せてくれる。「どうだ！」と言わんばかりであった。その後、保育者が何気なくした動作からヒントを得て、自分なりの工夫をしていくのだが、子どもが何度も挑戦したり、試したりする背景には、心が動かされることと、安心できる仲間や保育者が傍にいて、より継続して行ったり、工夫しようと思えるのではないかと感じた。この日、Y児は母親にただいま、と言う前に一番に見せていた。大事に、こぼさないように歩いて持って帰ってきた、葉っぱの上の宝石を！

保育者は子どもの遊びから、気づきの本質を見極め、子どもの遊びの気づきや興味に応じた遊びの環境の再構成が必要になる。子どもの好奇心にそった柔軟な発想の転換が出来る保育者の資質も求められていく。

子ども主体の遊びの中にこそ、子どもが遊びの中で自由に知的好奇心を発揮し、試す・くりかえす遊びを存分に楽しみながら、友だちと一緒に協同的に遊ぶことができるものとする。

### 「あれ？ なにかな？」 part6

幼稚園の周辺は自然がいっぱい！！四季折々に様々な表情をみせる。その自然とのかかわりの中で、人やものとの関係を自分で調節していく力を身につけていく。

子ども達はその変化をキャッチし思い思いに表現する。アリの行列を見つけるとは頭を寄せ合い覗き込み、アリの巣までついていく姿、四つ葉のクローバーを探す姿、落ち葉の舞い散る様子に心を惹かれる姿…。

保育園にいる時から散歩を経験している子どもは、継続して経験をしていく中で「昨日はここにあったよ！」「前は…去年はここに！」ということばが聞かれる。そして、「見てみ！」と年少児に「ここにアリのお家があるんやで、棒は突っ込んだらあかんよ、お家が壊れるやろ。」「四葉のクローバー探したろっか？」と経験を伝えていく。気づく喜び、見つける喜び、考える喜び、伝え合う喜びが子ども達をくりかえし自然の中に引き込むのだろう。「次はどうなってるかな？」「こんなのいつからあったっけ？」「またしようね、またいこうね。」

自然は「あれ？ なにかな？」と子ども達の足をとめる魔法をもっている。

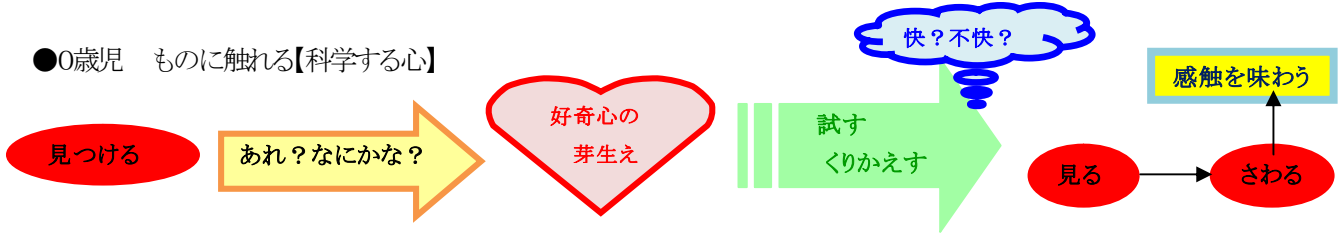


### Ⅲ、研究のまとめと今後の課題

#### 1. 0歳児から5歳児までの実践事例のまとめ

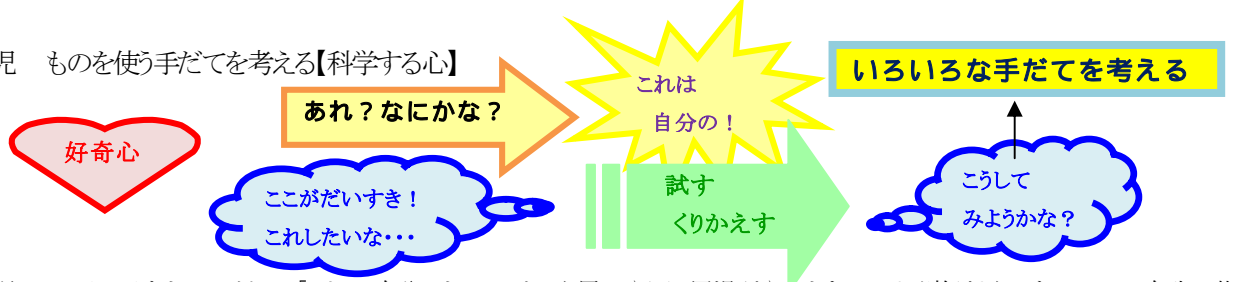
各歳児別の遊びの様子や、活動の様子をおおっていくと、試したり、くりかえしたりして遊ぶことで、それぞれの発達に応じた【科学する心】につながる重要なポイントが見えてくる。それらを歳児別に、まとめてみた。

##### ●0歳児 ものに触れる【科学する心】



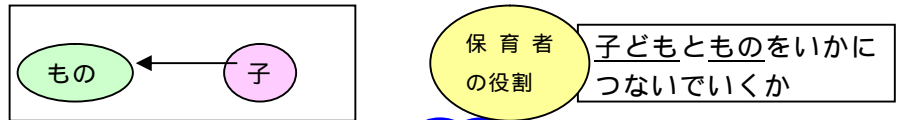
0歳児は、目に入るもの全てが「あれ? なにかな?」と、新発見の連続である。その新発見そのものが好奇心の芽生えであり、試す・くりかえす姿の第一歩でもある。保育者は、子どもが「あれ? なにかな?」と思えるように、いつでも見たり、触ったり、試したりできるような遊びの環境作りが大変重要である。そのためにはいじくりまわすことができる時間的・空間的余裕、環境としてただそこにあるのではなく、事例0-①②のような、保育者として子どもの好奇心を引き出すものは何かということを考える必要がある。

##### ●1歳児 ものを使う手だてを考える【科学する心】

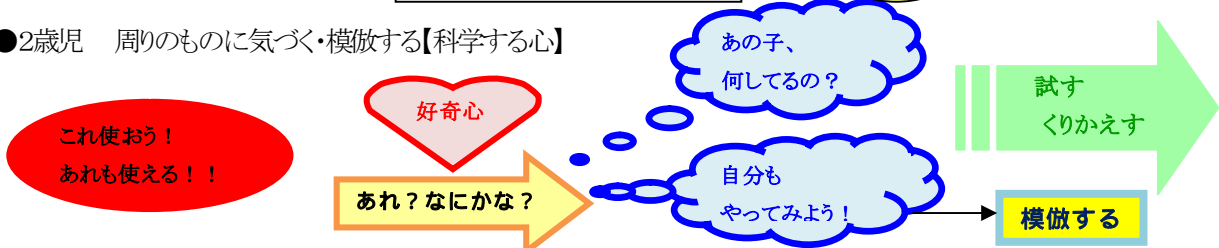


1歳児は、いろいろなものに対して「これは自分のもの!」という思いや同じ居場所やおもちゃでよく遊ぶようになる。このく自我の芽生えを、この時期に十分に認めてもらうことで、自分の安心できる場所を確保し、じっくりと遊びに取り組むことができ、自分でものを使う手だてを見出していくのではないかと考える。

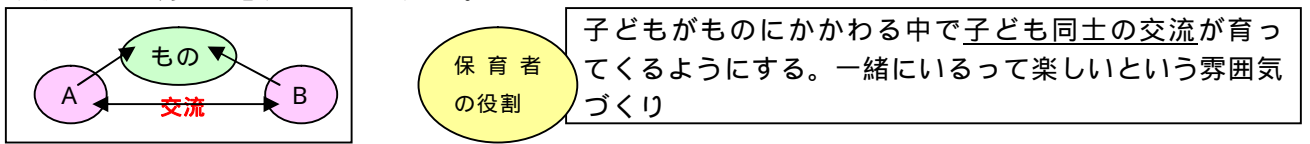
0・1歳児においての子どもとものとの関係は次のようになる。



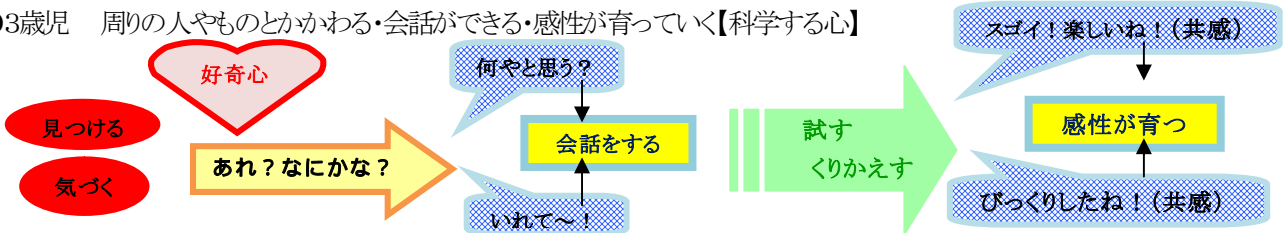
##### ●2歳児 周りのものに気づく・模倣する【科学する心】



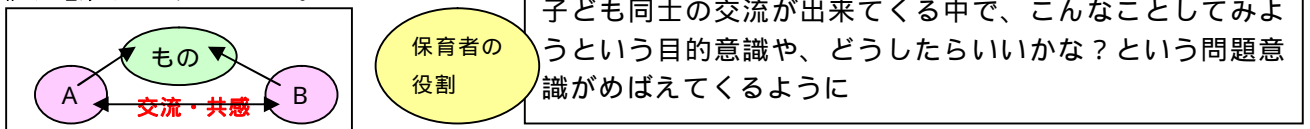
2歳児になると、自己の世界から、段々と自分を取り巻く世界が広がり、周りの友だちや大人(保育者含め)に目を向けられるようになって周りを見渡すことができるようになってきた。周りの人やものに気づき、「自分もやってみよう!」と遊びを通していろいろなことを模倣することから、次の3歳児の「周りの人やものとかわる力」へとつながっていくと思われる。そのためには共に同じ場を共有し、他者との遊びの伝達や交流がもてる環境を用意することが必要となる。



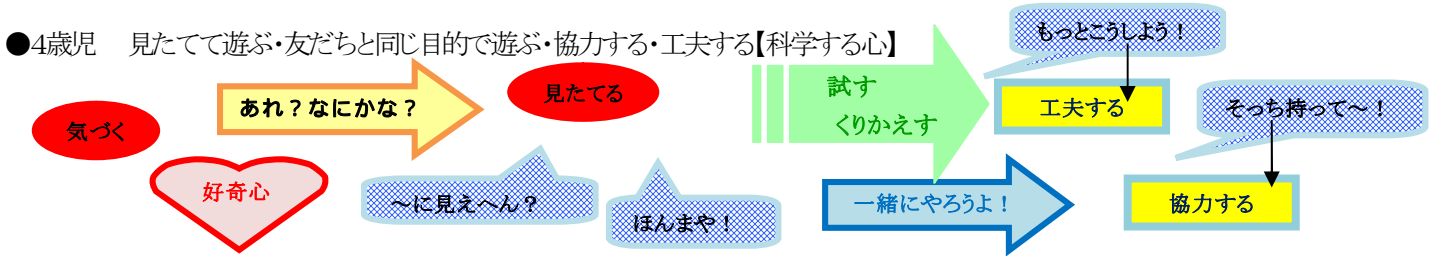
##### ●3歳児 周りの人やものとかわる・会話ができる・感性が育っていく【科学する心】



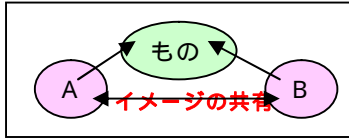
3歳児は、<好奇心の芽生え×自我の芽生え×人とかかわり>に加え、自分の思いを言葉で表現できるようになってくる。友だちを誘い合うというのではなく、関心のある遊びに自然と集まり、同じ場所、時間、モノ、人を共有している。その中で、自分の思いを伝える手段として、簡単な言葉であったり、擬音語であったり発することに楽しさを感じるようになってきた。会話を交わし、遊びをくりかえしていく中で、身近な事柄に対して「スゴイ!」と感動できたり、「びっくりした〜! 楽しいからもう一回やろう!」と、この時期に大切な感性(感動する・驚く・喜ぶなど)と共感する心が育まれていく。



●4歳児 見たてて遊ぶ・友だちと同じ目的で遊ぶ・協力する・工夫する【科学する心】

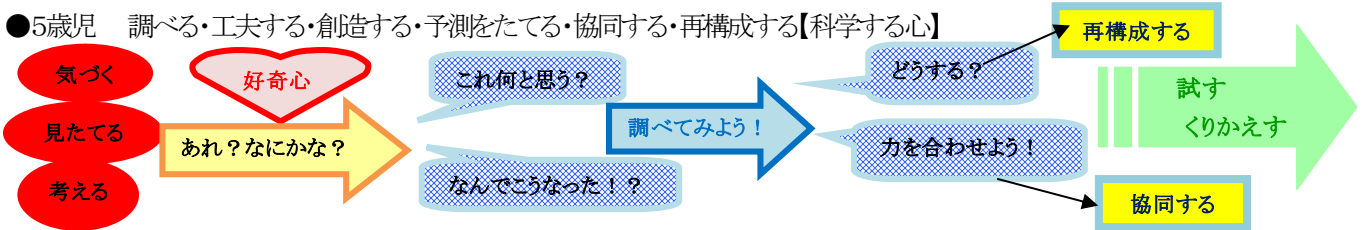


4歳児になってくると、友だちと同じイメージを共有する(見たてて遊ぶ)ことが楽しくなってきたことが伺える。同じイメージを共有することで、会話をしながら何度もくりかえし遊び、「一緒にやろう！」「こうしてみようよ！」と**協力する姿や工夫する姿**が見られるようになってきたのではないかと。これらの姿は次の5歳児への段階となる、友だちとともに同じ目的意識を持って遊ぶことができる**協同する姿や再構成する姿**につながってくると思われる。

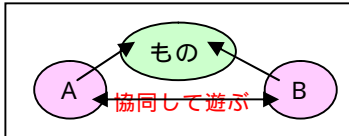


保育者の役割 遊びの中での工夫する姿、問題意識の共有ができ、協同的な探索活動ができるように

●5歳児 調べる・工夫する・創造する・予測をたてる・協同する・再構成する【科学する心】



5歳児になってくると、試す・くりかえす中で、自分たちでヒントを見出し、問題解決する力を身につけていく。与えられるだけの環境の中では、「どうすれば？」「なんで？」「こうしてみよう！」と考えることも少なかったであろう。こうした日常的に考える事、調べる事が子どもの意欲向上に対して、何より大事な一歩であると感じる。自分たちで協同しながら問題解決していくことが、協同的な学びにつながる探究活動である。保育者は、ある程度の遊びの広がりや予想し、環境の準備をしながらも、全て答えてしまうのではなく、「待つ」という姿勢が5歳児には必要である。「待つ」ことで、子ども主体の遊びとなり、自分達で工夫したり、力を合わせたり(協同する)、疑問に思ったことは調べてみようと思えるのではないだろうか？それが、子どもの**知的好奇心につながり、この時期にしっかり知的好奇心を育む**ことが、小学校教育へとつながっていくのではないだろうか？



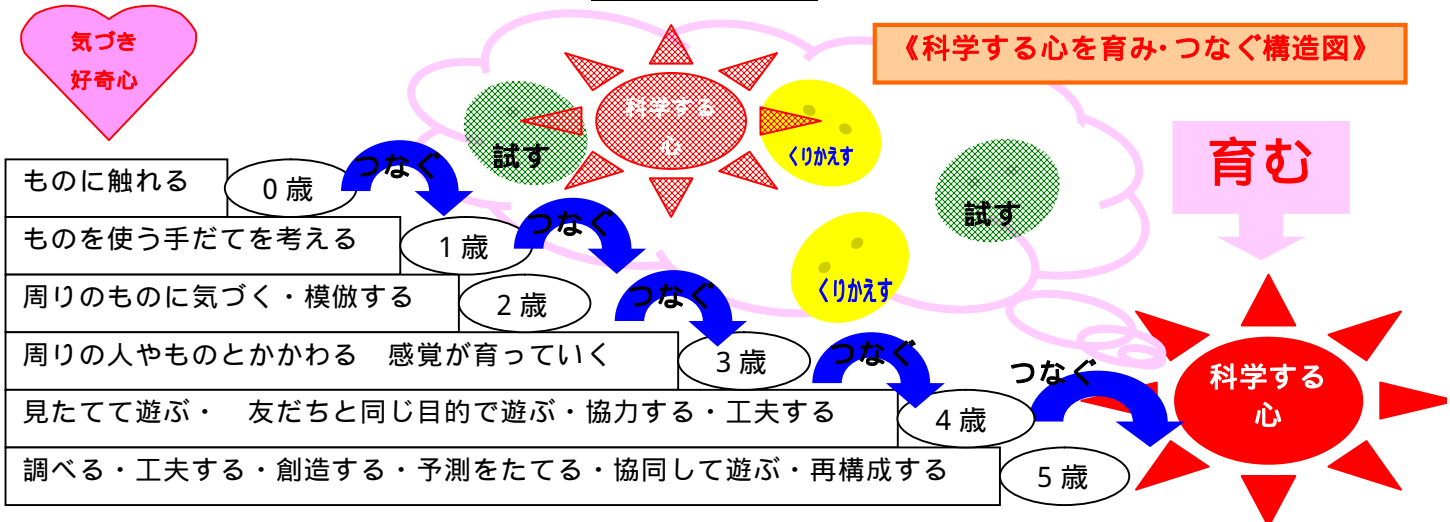
保育者の役割 協同的な探究活動につながる遊びの追求 小学校に向けての連携

以上のことから、遊びの中で、**試す・くりかえす**ということが展開されていくことによって、子どもの遊びが充実していき、探索する姿から探求する姿への変化が見られる。このように試す・くりかえすという視点で子どもの行為を見直すことで、その年齢に応じた「科学する心」が芽生えを捉えることができるのではないかとわかってきた。

保育者は、子どもが遊びの中で、どの場面やどのような所で、**気づきや好奇心**をもって見つめているのか、子どものまなざし(視線)の先をとらえて遊びを見るが必要になってくる。各歳児の事例の最後に「あれっ！なにかな？」で子どもの気づきを入れている。この一瞬見過ごしてしまいそうな子どもの行動の中に「科学する心」の芽生えの原点があり、子どもの気づきの質や、何に興味を持っている(好奇心)のかを見極める目が保育者に求められるのではないかと。そこから子どもの気づきに応じた適切な援助や環境構成をすることで、子どもの興味がさらに深まり、探索活動がいっそう深まり、探究活動へとつながっていくのではないかと考える。

2、科学する心を育み・つなぐ

子どもの気づきや好奇心の現れとして、子どもの試す・くりかえす遊びの経験を捉え、そこから「科学する心」が芽生えることが、保育者自身が丹念に見つめなおすことによってわかってきた。その「科学する心」の芽生えを育み・つなぐという観点から次の図のように考えた。



## 育むとは？

子どもの科学する心がどのように育まれたかを見極める観点として、「子どもの姿」と「保育者の視点・役割」を事例に基づいて整理した。

	子どもの姿	保育者の視点・役割	育むにつながる事例
①	試したり・くりかえしたりする遊びの経験が豊富になる。	試したり、くりかえしたりする遊びの場の工夫や援助。	0-①・1-①②・2-① 3-①②③・4-①②・5-①②
②	はじめの気づきからまた新たな気づきがうまれてくる。	子どもの気づきを感じとり、見極める力。	1-②・2-②・3-①②③ 4-①②・5-①②
③	感性が豊かになる。	感動体験の設定と遊びの協同者。	0-①②・1-①②・2-①② 3-①②③・4-①②・5-①②
④	人やものとのかかわりが深まる。	子どもとものをつなぐための援助。	0-①②・1-①②・2-①② 3-①②③・4-①②・5-①②
⑤	協力したり、工夫したりしながら仲間作りができていく。	子どもと子どもをつなぐ援助、協同の体験づくり。	3-①②③・4-①②・5-①②

このように本事例を整理すると、環境構成や適切な援助により、子どもの遊びが変化し、科学する心の芽生えに結びついたものと考えられる。保育者の役割として見守る・はげますから手を貸す、一緒に楽しむ・遊ぶ・見守る中で育むための環境構成の工夫が大きな役割を果たしており一番子どもにあった援助の中で育むことが大事だと改めて感じる。

## つなぐとは？

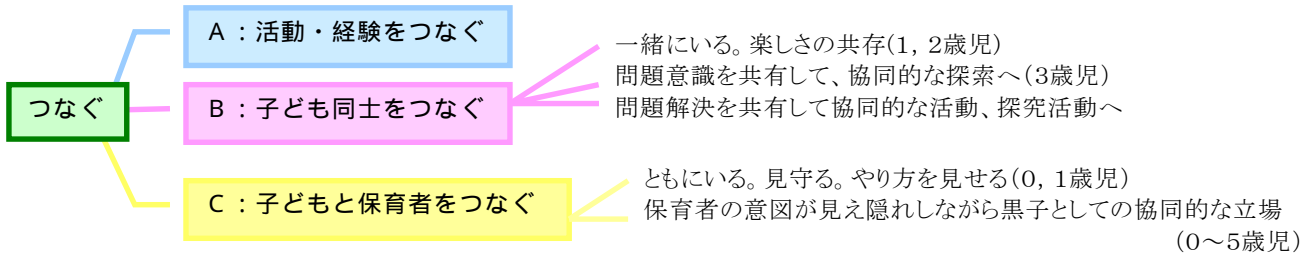
遊びをつなぐには、A:活動・経験をつなぐ、B:子ども同士をつなぐ、C:子どもと保育者をつなぐの、3つのつなぎに着目した。

A:活動・経験をつなぐとは、遊びと遊びがつながる。すなわち遊びが次の遊びに展開されさらに深まる遊び、または遊んだ経験から新たな遊びが発生していくことにより、遊びがつながる(事例1-②・2-①・3-①②・4-①②・5-①②)。

そして前頁での《科学する心を育み、つなぐ構造図》にみられるような、前の学年の経験をいかし新しい学年に遊びをつないでいく各年齢をつなぐ、連携を意味する。

B:子ども同士をつなぐとは、友だちと一緒にいることが楽しい、同じ場で遊ぶ楽しさを共存できる(事例1-①②・2-①②)。また年齢が大きくなるにつれ、遊びが広がっていく(事例3-①②③)。遊びがおもしろくなる工夫をしたり、友だちと問題解決しながらさらに遊びの探求心がすすんでいく(事例4-①②・5-①②)。

C:子どもと保育者をつなぐとは、0, 1, 2歳では、保育者が子どもを見守りながら、やりかたをみせ遊びの仕方を示していく。さらに保育者の意図が見え隠れしながら子どもの遊びをうまく引き出す工夫をする、遊びの協同者として位置することが必要である(事例0-①②)。



今後の保育の中でこのような姿が子どもに見られるように、子どもが遊びこみ、くりかえし遊べる経験を伴った遊びの環境を考えていくことが必要となる。そのためには、保育者同士が遊びのつながりを考え、より質の高い保育を展開することが望ましくなる。

## 3. 今後の課題

【科学する心】とは、日常生活の至るところにあり、子どもの身近にあるものである。いきなり【科学する心】が身につくのではなく、それまでの過程がとても大切だということである。それぞれの歳児に応じた援助をし、各歳児の子どもたちの好奇心を十分に満たしていく環境構成の工夫をすること、それが次の歳児につながっていくのである。この0歳児から5歳児までのつながりをより身近にそして積極的に進める事が出来る認定こども園としての役割を今後も明確に、そして細やかに研究していくことが、時代を先駆けて認可を受けた本園の課題となっていくものと考える。

保育園・幼稚園は就学前教育として、乳幼児期にしか学べないことがある場所である。数々の感動体験が味わえる場所。素直に「楽しい！」と思える心、「これ凄い！」と感じる心、「なんで？」と考える心……。これらの心が育まれる場所なのである。そして、「もう一回やろう！」と継続する力、「試してみよう！」と挑戦する力へとつながっていく。これらの心の種、力の種が子どもの根底となり、小学校や中学校……大人へとつながっていくのではないだろうか？それぞれの歳児の特性をよく踏まえ、それぞれの歳児、子どもに応じた対応、環境構成の工夫、そして、どうすれば子どもが楽しめるか、感動することができるのか、好奇心をいかにして満たしていくか、を大切に考え、育む・つなぐにはどうしていくことが望ましいかを、より深く考えていきたい。

そこで、本年度後半から次年度に向けては、「どのようにA:活動・経験、B:子ども同士、C:子どもと保育者とつなぐ」ことによって「科学する心を育む」ことになるのかを、具体的な教材研究・活動分析を行い、認定こども園としての役割を果たして行きたいと考える。最後になるが、子どもたちがたくさんの心の種をもって、巣立っていくことを望みたい。その心の種が、子どもたちのこれからの人生に、たくさんの花を咲かせてくれることを願って、この研究のまとめとする。